LGBTについての学生の理解とその課題
―敬和学園大学LGBT人権研究グループ Keiwa-signによる学生意識調査から―

敬和学園大学LGBT人権研究グループ
虎岩朋加[1]・Andrew Steltzer[2]
加納由季[3]・池田しのぶ[4]・片野 彩[5]

はじめに

本稿は、敬和学園大学LGBT人権研究グループKeiwa-sign（以下、Keiwa-sign）が、2016年７月に実施したLGBTに関する学生意識調査の結果に関わって、特に、注目すべき項目を分析する。その目的は、敬和学園大学の学生がLGBTについてどのような理解をしているのかを把握すること、そして、課題を洗い出すことにある[6]。

Keiwa-signは、キャンパスをLGBT当事者にとって過ごしやすい環境にするという目的で、2015年に発足した。これまでLGBTに関する教職員意識調査や研修会の実施などを行っている。本調査は、敬和学園大学での性的マイノリティについての意識や現状を把握するために行ったものであり、Keiwa-signとして今後どのように活動していくべきかの指針の一つとなると考えている。グループ活動の基盤となる敬和学園大学学生のLGBTに関する意識がどのようなものであるか、見ていきたい。

本稿では、まず、LGBTをめぐる調査について先行研究を概括する。次に、調査の概要と方法を示す。そして、調査結果から特に注目すべき項目について、その結果の提示をするとともに、分析する。最後に、LGBTをめぐる大学の課題を指摘する。

1　LGBTをめぐる各種調査について ―先行調査のレビュー―

LGBTをめぐる全国調査については、多くのメディアで言及されるのが、電通ダイバーシティ・ラボが2015年に実施した調査である[7]。電通の調査は、登録者のみを調査の対象として、メールなどの手段を通して協力を要請したものである。全国の20-59歳のモニター69,989人を対象に、事前スクリーニングを行った後、LGBT層該当者500人とストレート[8]該当者400人の合計900人に対象を絞って行われた。電通の調査によれば、LGBT層にあたるのは7.6％とされている。電通の調査では、「身体の性別」、「心の性別」、「好きになる相手・恋愛対象の相手の性別」の三つの組み合わせで分類して、電通ダイバーシティ・ラボ独自で編集した「セクシュアリティマップ」のうちストレート男性とストレー

ト女性以外の全てを、LGBT層とみなしている。

2016年に報告書が出版された「日本におけるクィア・スタディーズの構築」研究グループによる『性的マイノリティについての意識――2015年全国調査報告書』では、日本全国の層の実際の人口比率に合わせて、対象者を無作為に選んでいる[(9)]。同調査では、「日本社会で性的マイノリティがどのように捉えられているか」を明らかにすることを目的として、国勢調査と住民基本台帳を用いて無作為に調査対象を抽出し、20歳から79歳の2,600人を対象に実施したものである。調査票の回収数が1,259となっている。この調査は、性的マイノリティについての知識や認識、メディアをとおして見聞きした性的マイノリティ、性的マイノリティの存在の認識、性的マイノリティの行為・感情に対する嫌悪感や抵抗感、身近な人が性的マイノリティであった場合の嫌悪感、仲の良い友人が性的マイノリティであった場合の抵抗感、仲の良い友人からカミングアウトされた場合の感情、同性婚への賛否や見解、性的マイノリティについて教育で取り上げること、また性的マイノリティが教員になることへの賛否など、多岐にわたるトピックについての意識を問うている。本研究と関係するものとしては、仲の良い友人が性的マイノリティであった場合の反応や、性的マイノリティについての知識や認識、仲の良い友人からカミングアウトされた場合の反応、教育現場で教えることなどがあげられる。全体的に、嫌悪感や抵抗感をもつ割合は、女性よりも男性の方が高く、高齢者の方が割合が高いという傾向が見られるようだが、もちろん、一般化はできない。日本全国のさまざまな地域のさまざまな人々が、性的マイノリティについてどのような社会意識を持っているのかということについて基礎的なデータを提示していると言える。

宝塚大学の日高康晴が厚生労働省の委託を受けて行った調査は、日本における６自治体の幼稚園から高校までの教員約6,000人を対象としたものである[(10)]。ここには、調査参加者の半数以上の教員が、LGBTについて授業で取り扱う必要があると考えていることが示されている。しかし、実際に授業で扱ったことのある教員は、１割程度である。同調査によれば、実際、教員の７割が性的指向について正しい認識を持っておらず、また３割が同性愛を精神的疾患だと考えているということである。また教員の約７割が「性同一性障害」について授業で教える必要があると考えているのに対して、「同性愛」について授業で教える必要があると考えるのは約６割である。上記の研究グループによる調査が明らかにした一般的な人びとの意識と、教員の意識との間ではズレが見られることがわかる。上記の研究グループの調査が、義務教育で性的マイノリティについて教えることへの賛否を聞いた質問では、同性愛を教えることよりも、体の性別をかえたいと望む人のことを教えることへの反対の方が多い傾向が見られたという結果が示されている。これに対し、日高康晴による調査は、反対の結果を示している。

性的少数者の子どもたちに目を向けると、ゲイ男性の54％にいじめ被害経験があり、トランスジェンダーの約３割に不登校経験があるとされる[11]。これらの子どもたちの自傷行為経験率も高くなっているという。実際、LGBTを始めとする性的少数者やマイノリティの子どもたちへの学校における理解が進んでいるとは言いがたく、学校における男女二元論や異性愛中心の学校で、子どもたちが疎外感を感じたり、自己肯定感を低下させたりしているという。

LGBTの子どもたちが、学校でどのような経験をしているのかを明らかにした調査としては、国際人権団体ヒューマン・ライツ・ウォッチ（以下、HRW）によるものがあげられる[12]。2015年８～12月に調査し、12～24歳の458人のLGBTらが回答したとされている。この調査は、インターネット上や対面などで実施され、学校内でのLGBTについての否定的な意見を聞いたことがあるかどうか、などについて尋ねている。この調査によれば、教師や生徒がLGBTに関する否定的な言葉や暴言、冗談を言うのを聞いたことがある人は86％にのぼる。教師が言うのを聞いた人も29％となっている[13]。HRWの調査は、対面でも聞き取りを行っている。たとえば、高校でカミングアウトした後、「先生たちからは、僕がしたことは『学校の風紀を乱すことだ』と注意されました」とか[14]、「中学校の先生は、登下校はスカートの制服を着ることを条件に、学校生活では性差の出ない体操服の着用を許可してくれました。けれども、高校生になると一日中スカートの制服を着なければならなくなり、結局退学してしまいました」とか[15]いうような声が聞かれたということである。

国の動きとしては、文部科学省は、2014年には、国公私立の小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、及び特別支援学校を対象として、学校における性同一性障害に係る対応に関する状況調査の結果を公表した[16]。また、2015年には、調査に基づき「性的マイノリティ」とされる児童生徒全般についてのきめ細かな対応の実施に当たっての具体的な配慮事項等をとりまとめた[17]。また、2016年に文部科学省は「性同一性障害や性的指向・性自認に係る、児童生徒に対するきめ細かな対応等の実施について（教職員向け）」と題する手引を発行し、LGBTの子どもたちへの理解を深め、LGBTの子どもたちをどのように保護するのか、そのための方策を提言している[18]。

しかし、上記の各調査に見られるように、学校での性的マイノリティの児童生徒学生への対応は十分になされているとは言えない。教員養成カリキュラムに性的マイノリティについて学ぶことを盛り込むなどの提言がなされてはいるが[19]、実現には至っておらず、これらを学ぶ必要があると考える一部の教員が自主的に授業に盛り込む程度である。

初等、中等教育機関のみならず、当事者の若者たちが恋愛や将来の見通しに関する話題に頻繁かつ無防備にさらされる年代にある大学において、LGBTなどの性的少数者を始めとする多様な人のあり方を考慮に入れた環境整備が喫緊の課題と考えられる。

２　調査の概要、調査方法

以上で指摘した現状を踏まえ、本調査では、敬和学園大学での性的マイノリティについての意識を把握することを目的とした。現状として、性的マイノリティはどのくらいいるのか、性的マイノリティについての理解はどうなっているのかを調べることとした。

本調査は、敬和学園大学に在籍する全ての学生を対象としている。2016年７月に「敬和学園大学におけるLGBTの教育・職場環境アンケート（学生用）2016」と題したアンケート調査を実施した。Keiwa-signのメンバーが、全ての学生に調査票を配布できるようにスケジュールを立て、各教室を回り、授業担当教員の協力も得て、授業後ないしは授業前に調査票を配布、趣旨の説明、アンケートの回収を行った。在籍学生607人中407人の学生から回答を得ることができた。調査票は、本稿の最後に、データのテーブルと共に付録として掲載している[20]。

回収したアンケート結果を、すべてエクセルデータに入力した。入力後、今回調査した中で、性的マイノリティをめぐる意識に係る質問について、クロス集計の結果を中心に、本報告ではまとめている。

〈「敬和学園大学LGBTに関する学生意識調査2016」の概要〉

・調査対象：敬和学園大学に在籍するすべての学生
・調　査　地：敬和学園大学（新潟県新発田市冨塚）
・調査時期：2016年７月11日～29日
・調査手法：集合調査法
・有効回答数：407

３　データ分析

（１）　LGBT当事者の意識について

LGBT当事者自身に関わる調査の結果を紹介する[21]。アンケート調査の回答者のうち、LGBTに該当するのは15.2％（62人）であることがわかった（表１）。この項目では、「現在自認している性」「出生時の性」「大学でどの性別として生活しているか」「好きになる性」のうち、一つでも異性愛のモデルと異なる回答があるものをLGBTとみなしている。

「自認している性別について悩んだことがあるか」には8.4％（34人）が「はい」と答えており、自分の性について疑問を持っている学生がいることがわかった（表２）。今回の調査ではトランスジェンダーがどれくらいいるかということはわかっていないが、性自認について悩みを抱えている学生が一定数いることが示される回答となった。また「異性が好きなのか同性が好きなのか悩んだことがある」という設問には7.4％（30人）が「はい」

と回答しており、どの性を好きになるかについて悩んだことがある学生がいることもわかった（表３）。

（２） LGBTに対する学生の意識について

LGBTに対する学生の意識を見てみよう。LGBTに対する基礎知識を問うため、「LGBTという言葉の意味を知っているか」という問いを設けた。これに対し「はい」と答えたのは53.8％（219人）、「いいえ」は45.9％（187人）であり、言葉の意味を知っている学生と知らない学生の数はほぼ半数ずつであった（表４）。

さらに「大学内で性的マイノリティに関する差別的な言動を見聞きしたことがあるか」には、3.2％（13人）が「よくある」、16.0％（65人）が「ときどきある」、38.8％（158人）が「あまりない」、41.8％（170人）が「まったくない」と答えた（表５）。「よくある」「ときどきある」を合わせると、２割近くの学生がLGBTに関する差別的な言動を見聞きしたことがあると回答している。ここから、大学内に差別的な言動があるということがわかる。対して、８割の学生が差別的な言動を見聞きした経験が少ない、あるいはないと回答している。これらの学生のうちには、実際に差別的な言動を見聞きしたことのない学生と、差別的な言動を見聞きしたことがあってもLGBT当事者にとって何が差別的なのかを知らないから認識ができない学生がいることが推測できる。

また、「同性愛は精神的な病気の一つだと思うか」に対し、5.9％（24人）が「そう思う」、7.6％（31人）が「どちらかといえばそう思う」、14.5％（59人）が「どちらかといえばそう思わない」、57.5％（234人）が「そう思わない」、14.5％（59人）が「わからない」と答えた（表６）。同性愛を精神的な病気ではないと考えている学生が全体の７割を超えており、正しい知識を持っている学生が多いことがわかる。しかし同性愛を精神的な病気であると認識している回答が少数ではあるが存在することもわかった。

さらに「同性愛か異性愛かは本人の選択によると思うか」の回答は、「そう思う」が61.2％（249人）、「どちらかといえばそう思う」が15.2％（62人）、「どちらかといえばそう思わない」が4.4％（18人）、「そう思わない」が6.9％（28人）、「わからない」が12.3％（50人）だった（表７）。好きになる性は本人が選択するものであると考えている学生が、全体の7割以上を占めていることがわかった。同性愛を病気とみなすか、あるいは本人の選択によるものだと思うかのいずれの設問に対しても「わからない」と答えている学生が一定数おり、同性愛に対する正しい知識を学ぶ機会がないことがこの結果から読み取れる。

（３） LGBTに対する理解についてクロス集計結果の分析

LGBTに対する意識についてクロス集計した結果を分析する。まず、「知り合いに同性

愛者がいるかどうか」と、「同性愛に理解があるかどうか」の関係性について見る（表８）。知り合いに同性愛者がいると答えた20.1％（82人）の学生のうち、同性愛に理解が「ない」「どちらかといえばない」と答えたのは18.2％（15人）だった。対して、知り合いに同性愛者がいないと答えた53.8％（219人）の学生のうちでは、同性愛に理解が「ない」「どちらかといえばない」と答えたのは28.3％（62人）だった。

次に、「知り合いに性同一性障害の人がいるかどうか」と、「性同一性障害に理解があるかどうか」の関係性について見てみると、こちらでも知り合いに当事者がいる学生の方が性同一性障害に理解のある割合が多かった（表９）。知り合いに性同一性障害の人がいると答えた学生10.3％（42人）のうち、性同一性障害に理解が「ない」「どちらかといえばない」と答えたのは14.3％（６人）、対して、知り合いに性同一性障害の人がいないと答えた学生60.9％（248人）のうちでは32.6％（81人）だった。ここから、同性愛についても性同一性障害についても、知り合いに当事者がいる学生は、知り合いに当事者がいない学生に比べて、LGBTに理解のない人が少ないということがわかる。これは、身近に当事者がいるとLGBTを理解しようとする姿勢が生まれることを示唆する結果である。

他方で、「知り合いに同性愛の人がいるか」と、「同性愛のことを受け入れられるか」との関係性についてみてみると、最初の問いに対して「はい」と答えた20.1％（82人）のうち、同性愛のことを受け入れられないと思わない（受け入れられる）と答えた人は81.7％（67人）、知り合いがいない人53.8％（219人）のうち受け入れられると答えた人は73.5％（161人）となっている（表10）。知り合いに同性愛の人がいるほうが、いない人よりも受け入れられると答える人が若干多い。ただ、知り合いに同性愛の人がいないと答えた人であっても、性同一性障害のことを受け入れられるという人は、同性愛を受け入れられるという人に比べて20人増えて181人（82.6％）となり、性同一性障害については知り合いにいなくても受け入れられると答える人が多い（表11）。逆に「知り合いに性同一性障害の人がいるか」と、「同性愛のことを受け入れられるか」の関係性についてみてみると、「知り合いに性同一性障害の人がいるかどうか」という問いに対して「いいえ」と答えた60.9％（248人）のうち、同性愛の人を受け入れられる人は73.8％（183人）に対し（表12）、性同一性障害の人を受け入れられる人は81.9％（203人）と増える（表13）。このことから、性同一性障害を「障害」という病理としての理解可能性の範疇に組み込むことで、人々の間での「受け入れやすさ」は促されると言えるかもしれない。既出の文科省の通知もこの立場に基づくものである[22]。しかし、HRWも指摘しているように、病理学モデルに基づく理解は、かえって、トランスジェンダーの学生に、ジェンダーステレオタイプに従うことを強制したり、性別変更圧力をかけるなどの、否定的影響をもたらす可能性があることに留意したい。

当事者への理解という観点でいえば、他に注目すべき調査結果も出ている。「同性愛について理解があるか」と、「同性愛は精神的な病気の一つであると思うかどうか」との関係性を調べた（表14）。「同性愛に理解がある」「どちらかといえばある」と答えた75.2%（306人）のうち、「同性愛は精神的な病気の一つである」「どちらかといえばそう思う」のいずれかに回答したのは9.2%（28人）であった。それに対し、「同性愛について理解があるか」という質問に「どちらかといえばない、ない」と答えた人24.8%（101人）のうち、同性愛を精神的な病気の一つだと「（そう）思う、どちらかといえばそう思う」人は26.7%（27人）に上る。しかし、もう一方で、自分は同性愛について理解があると思っている人75.2%（306人）のうち、9.2%（28人）が同性愛を病気だと考えており、同性愛に理解があると感じているにも関わらず同性愛に対して間違った知識を持っている学生がいることは、注目に値する結果である。

さらに、「同性愛について理解があるか」と「同性愛か異性愛かは本人の選択によるものだと思うか」との関係性を調べると、多くの学生が同性愛について間違った認識を持っていることがわかった（表15）。「同性愛に理解がある」「どちらかといえばある」と答えた学生のうち、「同性愛か異性愛かは本人の選択によるものだと思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた人は81.7%（250人）にも上った。同じ問いに対して、理解がないと答えた学生の間で、同性愛が選択によるものだと思っている人は、60.4%（61人）であった。この結果からわかるように、理解があると答えていても、同性愛が本人の選択によるものであると思っている学生が非常に多いことがわかる。このことは、今回の調査で明らかになったLGBT理解に関する大きな問題の一つだと言える。正しい知識を持っていないにも関わらず、理解したつもりになっている学生がいることがわかる。

次に、当事者の悩みとして読み取ることができる結果について見てみたい。「異性が好きなのか同性が好きなのか悩んだことがあるか」という問いに、「はい」と答えた30人（全体の7.4%）のうち、同性愛を精神的な病気の一つだと「思わない、どちらかといえば思わない」と答えた人は25人いて、「そう思う」と答えた人が２名いた（表16）。性的指向について悩んだことがある学生の中に、同性愛は病気だと考えている層が、わずかだがいることがわかった。

また、「異性が好きなのか同性が好きなのか悩んだことがある」とする学生のうち、「同性愛か異性愛かは本人の選択によるものだと思う」「どちらかといえばそう思う」と答えたのが66.7%（20人）に上る（表17）。性的指向に悩んだことがある学生の中に、同性愛は本人の選択によるものだと考えている層が半数以上いることがわかる。LGBTに寛容な周囲の環境を作ると同時に当事者に正しい知識を得る機会をつくることが求められる。

（4） LGBTの割合について

先にも述べたが、アンケート調査の回答者のうちLGBTの学生に該当するのは15.2％であることが分かった。この項目では「現在自認している性」「出生時の性」「大学でどの性別として生活しているか」「好きになる性」のうち、一つでも異性愛のモデルと異なる回答があるものをLGBTとしてみなしている。ここでいう異性愛のモデルとは、「現在自認している性」、「出生時の性」、「大学でどの性別として生活しているか」の回答が一致しており、また、この一致した性とは異なる性を「好きになる性」として挙げている場合とみなしている。その意味では、電通の調査の考え方と近い。ただ、今回の調査では、電通の上記の調査と比べても、性的マイノリティの割合が多いことが特徴的である。

調査項目２から５は、「自認している性別（１.女性　２.男性　３.Xジェンダー・中性　４.その他）」「戸籍の性（男性・女性）」「大学でどの性別として生活しているか（１.女性　２.男性　３.Xジェンダー・中性　４.その他）」、「好きになる相手の性別（１.女性　２.男性　３.両性（女性、男性）　４.相手の性別は問わない　５.該当なし（特定の人を好きにならない）　６.その他」を聞いており、これについて、Keiwa-signは、以下のように考えた。

1　調査項目２から５の回答で、異性愛者のモデルとは異なる回答を性的マイノリティとみなした
2　LGBは全体の５％
3　性的指向に関してLGB以外（その他）は10％
4　上記15％のなかに、Tが含まれる

グループの目的からも自明だが、今回の調査は、カテゴリーごとに区別して、それぞれどれくらいいるかということを把握することを求めていない。したがって、調査自体も、区別するような設計になっていない。トランスジェンダー（T）に関して、そのことが特によく現れていると考えられる。

性的マイノリティの割合が多い理由はいくつか考えられる。たとえば、性自認や性的指向について自己肯定感をもてない学生たちが、勉強に気持ちが向かず、さらに自己肯定感を低下させ、学力的にいわゆる落ちこぼれとなっていき、いわゆる学力底辺校に、集まりやすいというものである[23]。あるいは、LGBとはっきり答えることに恐れや心配を持っている人たちが、中性と回答した結果、性的指向に関してLGB以外の割合が増加したという可能性もある。

こうした調査のあり方については、疑問が提示されることも考えられる[24]。たとえば、自認している性別の自認の範囲が非常に広いのではないか、という疑問である。性別違和

がない人が、改めて自認する性別について質問された場合に、違和がないゆえに、中性であることを選んだりするかもしれない。また、性による「らしさ」を押し付けられることへの抵抗感から、「ボーイシュ」な格好をすることが好きな女性が、中性を選んだりする傾向があるのではないか、ということも考えられる。

こうした指摘に鑑みて、割合の高さの背景は十分に考慮されなければならないだろう。性別を意識したことがないゆえに、中性であることを選んだり、性別らしさを押し付けられる抵抗感から、中性を選んだりするという可能性については、昨今の「ジェンダーフルイド（gender fluid）」という新しい言葉が示すように、性別二元論にとらわれない性表現や性自認が現れるようになってきていることからも、理解可能である[25]。他方で、性別を意識したことがない人たちが、必ずしも、中性であることを選ぶとは言えず、逆に、社会的期待に沿った回答をするということも考えられる。

留意したいのは、本調査は、性的マイノリティを、一括りに扱おうとしているわけではないという点である。LGBTそれぞれの経験は異なり、レズビアン（L）とゲイ（G）とトランスジェンダー（T）のそれぞれのコミュニティは基本的に分かれていることは、本調査も理解している[26]。性的マイノリティの割合の高さについての回答の背景を探るには、定量的な調査では、限界がある。この点、質的調査が求められることとなる。

4　LGBTをめぐる学内の課題

本調査結果の分析から得られた、学内における課題をまとめたい。

同じ環境で過ごす学生から、差別的な言動を見聞きしたことがあるかどうかということについて、異なる二つの答えが出ている。このことから、LGBT当事者にとって何が差別的なのかを知らない学生がいる可能性があるということがわかる。一般に偏見や、差別は、知識の欠如によるものが多く、実際、なにが差別に当たるかわからないということは、知識が共有されていないことの現われとも言える。大学教育の中で、LGBT当事者にとってどのようなことが差別的な言動になりうるのか、学生、教職員も含めて知る機会をもつことが必要になるだろう。

調査からは、同性愛についての知識が、学生の間で共有されていないことも示唆された。このことが、当事者自身の悩みの原因にもなりうること、差別的な言動につながりうることは、すでに指摘したとおりである。しかし事態は複雑である。同性愛に理解があると感じているにもかかわらず、同性愛に対して間違った知識を持っている学生がおり、このことは、自分とは異なる他者への無関心を示しているように思われる。

これらの結果から、学内の課題としては、第一に、学内に一定の割合で当事者がいるということを、学生、教職員共に、共有する必要がある。これにより、性的マイノリティに

対して理解しようという姿勢の醸成を促進することが期待できる。第二に、LGBTについての理解が一般的に共有されるような工夫が学内で求められる。同性愛や性同一性障害について、知識が共有されていないことは、差別的な言動を生み出す原因になっていたり、当事者自身が自己理解に苦しむ原因にもなったりしている。Keiwa-signでは、大学図書館の協力を得て、LGBT関連図書コーナーの設置などを進めてきたが、今後は、授業内で性的マイノリティについての話題を取り扱ったり、研修会を開催したり、学内で情報発信するなど、さらなる活動が必要だと言える。

おわりに

これまで見てきたように、今回の学生意識調査では、学内での当事者の存在を認めることができた。しかし、当事者を取り巻く学内の状況が、決して良好とは言えないこともわかった。「同性愛に理解がある」としながら同性愛について間違った知識を持っている学生がおり、同時に、性的指向に悩んだことがある学生が同性愛について間違った知識を持っているという事実も浮かびあがってきた。性的マイノリティであるがゆえに、いじめにあった経験や、不登校経験がある子どもたちがいることが、他の調査で明らかになっているが、学生たちのうちにも、過去に、いじめや不登校を経験している可能性もあり、また、これから、そのような経験をする可能性もある。かれらに寄り添った対応をするため、正しい知識を得る機会を学内に生み出し続けることが必要である。正しい知識を持った理解者が増えれば、当事者を取り巻く環境も改善し、当事者も正しい知識を得られると考えられる。そうした環境を作るための土壌作りとして、LGBTについての正しい知識を広めるKeiwa-signの活動の重要性を改めて確認することができた。

註

（1）敬和学園大学人文学部教員
（2）敬和学園大学人文学部教員
（3）敬和学園大学人文学部学生
（4）敬和学園大学人文学部教員
（5）敬和学園大学人文学部学生
（6）本報告は、敬和学園大学の協力を得て、LGBT人権研究グループKeiwa-signが実施した意識調査について、虎岩、Steltzer、加納、池田、片野が共同執筆した。調査自体を実施したのは、以上５名に、長濵美郷、大岩彩子を含む。
（7）電通ダイバーシティ・ラボ　http://www.dentsu.co.jp/news/release/pdf-cms/2015041-0423.pdf
（8）ここでいうストレートとは、異性愛者を意味する。
（9）釜野さおり・石田仁・風間孝・吉仲崇・河口和也『性的マイノリティについての意識――2015年全国調査報告書』科学研究費助成事業「日本におけるクィア・スタディーズの構築」研究グルー

プ（研究代表者 広島修道大学 河口和也）編（2016）。http://alpha.shudo-u.ac.jp/~kawaguch/chousa2015.pdf

(10) 日高康晴ほか「教員5,979人のLGBT意識調査レポート」、平成26年度厚生労働科学研究費補助金エイズ対策政策研究事業 個別施策層のインターネットによるモニタリング調査と教育・検査・臨床現場における予防・支援に関する研究（2014）。http://www.health-issue.jp/teachers_lgbt_survey.pdf

(11) 日高庸晴「LGBT学生の存在を考える――キャンパス内でのダイバーシティ推進のために」『大学時報』第384号（2014）、76-83頁。

(12) ヒューマン・ライツ・ウォッチ『出る杭は打たれる――日本の学校におけるLGBT生徒へのいじめと排除』（2016）。https://www.hrw.org/sites/default/files/report_pdf/japan0516_japaneseweb_5.pdf

(13) ヒューマン・ライツ・ウォッチ『出る杭は打たれる』、41頁。

(14) ヒューマン・ライツ・ウォッチ『出る杭は打たれる』、11頁。

(15) ヒューマン・ライツ・ウォッチ『出る杭は打たれる』、56頁。

(16) 文部科学省「学校における性同一性障害に係る対応に関する状況調査」（2014）。http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2016/06/02/1322368_01.pdf

(17) 文部科学省「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」（2015）。http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/04/1357468.htm

(18) 文部科学省「性同一性障害や性的指向・性自認に係る、児童生徒に対するきめ細かな対応等の実施について（教職員向け）」（2016）。http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/28/04/1369211.htm

(19) ヒューマン・ライツ・ウォッチ『出る杭は打たれる』、５頁。

(20) 調査票については、付録１を参照のこと。

(21) データ表については、付録２を参照のこと。

(22) ヒューマン・ライツ・ウォッチ『出る杭は打たれる』、63頁。

(23) 性的マイノリティの学生の間の自己肯定感の低下と学力の低下の関係については、アメリカで研究が進んでいる。例えば、Cris Mayo, *LGBTQ Youth and Education: Policies & Practices*, (NY: Teachers College Press, 2014), 6 を参照。

(24) 本調査結果について、意見をくださった人類学者でアクティビストの砂川秀樹氏からいただいた意見をもとに、本項は構成されている。砂川氏は、朝日新聞記事での本調査の紹介（『朝日新聞』新潟版（2016年11月11日付朝刊）を読んで、ご意見を寄せてくださった。貴重なご意見をくださった砂川氏には、お礼を申し上げたい。

(25)「ジェンダーフルイド」とは、「性別が流動的。性自認または性別表現が、男性か女性かで揺れ動いている人、またはその中間のどこかに位置している人」とされている。ナショナルジオグラフィック『ナショナルジオグラフィック「ジェンダー革命」2017年１月号』（日経BP社、2016）、11頁。

(26) 砂川氏の指摘による。砂川氏は、新宿二丁目でのフィールドワークに基づいたゲイ・コミュニティについての著書で、性的マイノリティをめぐる用語を整理し、それぞれの経験や問題が大きく異なることに言及している。砂川秀樹『新宿二丁目の文化人類学――ゲイ・コミュニティから都市をまなざす』（太郎次郎社エディタス、2015）、27-30頁。

付録１　調 査 票

1　あなたの学年をお答えください	1. １年生　2. ２年生　3. ３年生　4. ４年生 5. その他
2　あなたが現在自認している性別をお答えください	1. 女性　2. 男性　3. Xジェンダー・中性 4. その他
3　あなたが出生時に戸籍や出生届に記載された性別をお答えください	1. 女性　2. 男性
4　あなたは大学で、どの性別として生活しているか、お答えください	1. 女性　2. 男性　3. Xジェンダー・中性 4. その他
5　あなたが好きになる相手の性別について、お答えください	1. 女性 2. 男性 3. 両性（女性、男性） 4. 相手の性別は問わない 5. 該当なし（特定の人を好きにならない） 6. その他
6　あなたは、自認している性別について悩んだことがありますか	1. はい　2. いいえ
7　あなたは、異性が好きなのか、同性が好きなのか、悩んだことがありますか	1. はい　2. いいえ
8　これまでに、性的マイノリティという言葉を聞いたことがありますか	1. はい　2. いいえ
9　これまでに、LGBTという言葉を聞いたことがありますか	1. はい　2. いいえ
10　性的マイノリティという言葉の意味を知っていますか	1. はい　2. いいえ
11　LGBTという言葉の意味を知っていますか	1. はい　2. いいえ
12　同性愛について自分は理解があると思いますか	1. ある 2. どちらかといえばある 3. どちらかといえばない 4. ない
13　性同一性障害について自分は理解があると思いますか	1. ある 2. どちらかといえばある 3. どちらかといえばない 4. ない

14　同性愛について授業で学びたいと思いますか	1. はい　2. いいえ　3. わからない
15　性同一性障害について授業で学びたいと思いますか	1. はい　2. いいえ　3. わからない
16　これまで同じ学校（小中高大）に、同性愛と思われる人がいましたか	1. はい　2. いいえ　3. わからない
17　これまで同じ学校（小中高大）に、性同一性障害と思われる人がいましたか	1. はい　2. いいえ　3. わからない
18　あなたの大学は、ダイバーシティ（女性、障がい者、外国人など、多様な人材）に対する理解、取り組みが浸透していると思うか、お答えください	1. そう思う 2. ややそう思う 3. あまりそう思わない 4. そう思わない
19　大学内で性的マイノリティに関する差別的な言動を見聞きしたことがありますか（講義時間、休み時間、部活動・サークル活動の時間などを含みます）	1. よくある 2. ときどきある 3. あまりない 4. まったくない
20　知り合いに同性愛の人がいますか	1. はい　2. いいえ　3. わからない
21　知り合いに性同一性障害の人がいますか	1. はい　2. いいえ　3. わからない
22　同性愛は精神的な病気の一つだと思いますか	1. そう思う 2. どちらかといえばそう思う 3. どちらかといえばそう思わない 4. そう思わない 5. わからない
23　同性愛か異性愛かは本人の選択によるものだと思いますか	1. そう思う 2. どちらかといえばそう思う 3. どちらかといえばそう思わない 4. そう思わない 5. わからない
24　正直な気持ちとして同性愛のことは受け入れられないと思いますか	1. はい　2. いいえ
25　正直な気持ちとして性同一性障害のことは受け入れられないと思いますか	1. はい　2. いいえ

付録２　データ表：表中の数字は全て単位(人)である

表１

自認する性 ＼ 好きになる性	女 性	男 性	合 計
女　　性	1	195	196
男　　性	149	1	150
両　　性	8	9	17
性別は問わない	14	5	19
該　当　な　し	7	6	13
そ　の　他	2	0	2
合　　計	181	216	397※1
マイノリティ（内数）	32	21	53※2

Ｑ２　現在自認している性別
Ｑ３　あなたが出生時に戸籍や出生届に記載された性別
Ｑ４　あなたは大学で、どの性別として生活しているか
Ｑ５　好きになる相手の性別
※1 無回答（６人）とＱ２で中性と回答した人（４人）は含まれない。
※2 全体のマイノリティは62人である。合計には表で示される53人の他にＱ２で中性と回答した人、Ｑ２、Ｑ３、Ｑ４の回答が異性愛のモデルと合致しない人の数（９人）は含まれない。

表２

Ｑ６	1	2
	34	372

Ｑ６　自認している性について悩んだことがあるか
１．はい　２．いいえ

表３

Ｑ７	1	2
	30	375

Ｑ７　異性が好きなのか同性が好きなのか悩んだことがあるか
１．はい　２．いいえ

表４

Ｑ11	1	2
	219	187

Ｑ11　LGBTという言葉の意味を知っているか
１．はい　２．いいえ

表5

Q19	1	2	3	4
	13	65	158	170

Q19　大学内で性的マイノリティに関する差別的な言動を見聞きしたことがあるか
1．よくある　2．ときどきある　3．あまりない　4．まったくない

表6

Q22	1	2	3	4	5
	24	31	59	234	59

Q22　同性愛は精神的な病気の一つだと思うか
1．そう思う　2．どちらかといえばそう思う　3．どちらかといえばそう思わない
4．そう思わない　5．わからない

表7

Q23	1	2	3	4	5
	249	62	18	28	50

Q23　同性愛か異性愛かは本人の選択によると思うか
1．そう思う　2．どちらかといえばそう思う　3．どちらかといえばそう思わない
4．そう思わない　5．わからない

表8

理解があるか／知り合いにいるか	あ　る	どちらかといえばある	どちらかといえばない	な　い
い　る	42	25	11	4
い　な　い	57	100	30	32
わからない	38	44	11	13

Q12　同性愛に理解があるか
Q20　知り合いに同性愛者がいるか

表9

理解があるか／知り合いにいるか	あ　る	どちらかといえばある	どちらかといえばない	な　い
い　る	22	14	3	3
い　な　い	68	99	42	39
わからない	29	46	23	16

Q13　性同一性障害に理解があるか
Q21　知り合いに性同一性障害の人がいるか

表10

Q20-24	1	2	3
1	15	58	18
2	67	161	87

表11

Q20-25	1	2	3
1	15	38	15
2	67	181	90

Q20　知り合いに同性愛の人がいるか
1．はい　2．いいえ　3．わからない
Q24　正直な気持ちとして同性愛のことは受け入れられないと思うか
1．はい　2．いいえ
Q25　正直な気持ちとして性同一性障害のことは受け入れられないと思うか
1．はい　2．いいえ

表12

Q21-24	1	2	3
1	6	65	19
2	36	183	96

表13

Q21-25	1	2	3
1	6	45	16
2	36	203	99

Q21　知り合いに性同一性障害の人がいるか
1．はい　2．いいえ　3．わからない
Q24　正直な気持ちとして同性愛のことは受け入れられないと思うか
1．はい　2．いいえ
Q25　正直な気持ちとして性同一性障害のことは受け入れられないと思うか
1．はい　2．いいえ

表14

Q12-22	1	2	3	4
1	4	5	6	9
2	6	13	7	5
3	6	30	17	6
4	107	96	19	12
5	14	25	3	17

表15

Q12-23	1	2	3	4
1	97	109	26	17
2	14	30	14	4
3	3	10	3	2
4	11	9	3	5
5	12	11	6	21

Q12　同性愛について自分は理解があると思うか
1．ある　2．どちらかといえばある　3．どちらかといえばない　4．ない
Q22　同性愛は精神的な病気の一つだと思うか
1．そう思う　2．どちらかといえばそう思う　3．どちらかといえばそう思わない
4．そう思わない　5．わからない
Q23　同性愛か異性愛かは本人の選択によるものだと思うか
1．そう思う　2．どちらかといえばそう思う　3．どちらかといえばそう思わない
4．そう思わない　5．わからない

表16

Q７-22	1	2
1	2	22
2	0	31
3	3	56
4	22	210
5	3	56

表17

Q７-23	1	2
1	15	234
2	5	56
3	2	15
4	4	24
5	4	46

Ｑ７　あなたは、異性が好きなのか、同性が好きなのか、悩んだことがあるか
１．はい　２．いいえ
Ｑ22　同性愛は精神的な病気の一つだと思うか
１．そう思う　２．どちらかといえばそう思う　３．どちらかといえばそう思わない
４．そう思わない　５．わからない
Ｑ23　同性愛か異性愛かは本人の選択によるものだと思うか
１．そう思う　２．どちらかといえばそう思う　３．どちらかといえばそう思わない
４．そう思わない　５．わからない